

## 《釈 徹宗氏》

### 「仏教が語る<sup>いのち</sup>生命」

#### 生命の捉え方の積み重なり

人間の生命の捉え方は、霊長類から原始人類、それから協力しあって生活するようになり、そして文明が生まれて、と人類の発達していく歴史の中で、それぞれの生命観みたいなものが何層にも積み重なって体に刻まれながら今日までつなげられてきました。そして現代社会の一番の表層になって、我々一人ひとりがかけがえのない命であって、無条件に尊重されなければならないというところまで生命のストーリーは歩みを進めてきました。人類は苦勞に苦勞を重ねてやっとここまで到達したのです。

#### 伝統宗教における老いや死

我々一人ひとりが生命活動を営み、人生という物語を編み上げています。その生命のストーリーが違えば生命の意味も変わってきます。果たして人類はどのようにしてこの死と向き合ってきたか。死や老いの苦惱を引き受けて、見事にこの苦難の人生を生き抜いてきたか。そのモデルは伝統宗教にあります。

まず、キリスト教では人生の目的は神と出会うためと説いています。老いや死をはるかに超えて大切なことが神との出会いであり、そこに全身全霊を傾けるのです。次に、イスラム教は老いや死は基本的に思いどおりにならないので神にお任せする、神が望むならという考えです。儒教では、長く生きることが人生の目標であるという考えで、加齢にしたがってだんだんと人間の値打ちが上がるというような生命観を持っています。また、親への孝行、死者への礼儀を重視します。

一方、仏教では年をとったからといって尊敬されません。若くても執着心を捨て、欲望をきちっとコントロールしている人は敬われる。心や体を整えれば苦しみの連鎖から安らぎや喜びの連鎖へと転換が始まり、老いの喜びや死と向き合う喜びにつながると説きます。まとめていといずれの宗教も、老いや死に不安を感じなくていいんだ、大きな価値に身を委ねるんだ、執着して自分というものにしがみつくと苦しみを生み出すんだというようなことを説いています。

#### 日本仏教の生命観

亡くなったら浄土に往生して成仏して仏となるのが日本仏教の特徴です。したがって、どう死を看取るかが発達します。とにかくひたすら嫌なもの、避けようとするものだった死を引き寄せて、そして、今をどう生きるかに転換していく。これをするのは人間だけです。人間だけが自分が死ぬことを知っており、他者の死を悼み、共感し、祀ります。もし明日死ぬとしたら、今日をどうやって過ごすか。もっとやらなきゃいけないことがある、会いたい人がいる、あの人に連絡したいということになるかもしれません。リアルに死を手元に引き寄せれば、ふだん大事だと思っているものがつまらなく見えるかもしれないし、思っていないものが立ち上がったたりするかもしれません。

#### ストーリーに身を委ねて歩む

釈迦の一生を描いた涅槃図というのが日本でも随分描かれてきました。真ん中に息を引きとって行くブッダがいて、沙羅双樹の木を描くというのが定型になっています。雲に乗った天女のような人はお母さんのマヤーで、ブッダを迎えにきているのです。

生物としての死はある意味、大変冷酷で残酷な一つの現象ですが、死が生み出してきた文化というのはとても豊かで温かいものがあります。そこには死を超えても続く道があり、続く世界があります。これは宗教性の琴線の部分です。世代を超え、民族を超え、文化圏を超え、ダイレクトに響く、人類が人類として営んできたその生命の歩みに直結する、かなり古層の部分に直結するような語りだろうと思います。先に逝った方の語りに耳を傾け、先に逝った方の目を意識して暮らすというのは人間にとってすごく大

事なことです。我々は知性や理性のガードに守られていますので、時にこのガードを全面的におろすような場所に身を置く、そんな時間と場所が皆さんにあるか、そういう問いかけになります。

その古層の部分からどう歩んでいくかということに関しては、日本仏教にしても様々なルートの歩みが説かれていますので、ぜひともこれからも引き続いてそういう語りに耳を傾け、その語りに身を委ねていければ、きっと命の意味や死の意味が変わってきたりするのではないかと思います。

私は浄土真宗の僧侶ですので、息を引き取ればお浄土に往生するという道筋を歩こうと見よう見まねで歩いているところです。本当に薄紙を一枚一枚積んでいくような形で、とてもこんな道はピンとこないと思うときもありますし、自分がそのストーリーに身も心も委ねることができたという気分になることもあります。浄土に往生するというストーリーに身も心も本当に委ねることができたら、きっと生き死にの問題は解決するのだらうと漠然と思いながら歩みを進めているところです。